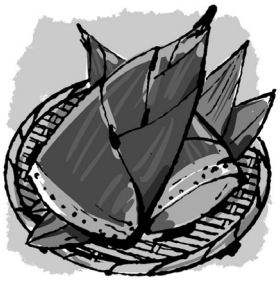
今週の
倫理

2025.4.26～5.2

4月のテーマ　｜　自己革新

1435号

従業員への感謝のハガキが経営者の心を磨き高める



茨城県古河市で和食料理店を経営するN氏は、感謝のハガキを書く実践に取り組んでいます。

N氏の会社はコロナ禍で三期連続赤字となったことから、八店舗あった店を四店舗に縮小することになりました。飲食業界に見切りをつけた従業員が相次いで退職する中、営業ができる最低限の従業員とともに立て直しを図ります。

財務コンサルタントの仕事をする倫理法人会の会員に相談すると、「社員に毎日三枚の感謝のハガキを書くと粗利益一〇〇倍になりますよ！」と言われました。

早速、取り組んでみると、従業員一人ひとり違う内容を書くため、自然と従業員の普段の様子が思い浮かび、それぞれの良いところや、仕事をしている姿を振り返るようになりました。

これまでも従業員に労いの言葉をかけていましたが、この実践に取り組み文字に書き起こしたことで、さらに感謝の思いは深まっていきました。

転職を考えていた料理長はハガキが届くと「もう少しここで頑張ってみます」と踏みとどまってくれました。また、ある従業員はハガキに感動し、額に入れて自宅に飾っているといいます。従業員の反応が嬉しく、さらにハガキを書く実践に打ち込むようになります。

コロナウイルス感染症の分類が５類に引き下げられ、宴会の件数が徐々に増えつつあった頃、従業員への感謝の思いを形にすべく待遇改善に取り組みます。

自らの給料もゼロにし、交際費を限りなく減らしたことで、全従業員の給料を上げ、ボーナスも出すことができました。

従業員もそれに応えるかのように働き方が変わり始めます。N氏の思いを受けとめ、皆が同じ方向を向いて仕事をするようになりました。すると、原価率が抑えられるようになったのです。

さらには、お客様にもハガキを出すようになり、リピーターが着実に増えていきます。ハガキに感銘を受けた地元企業の社長は、会合や宴会がある度に団体で店を利用してくれるようになりました。

従業員の働き方が変わり、顧客が増えたことで気が付けばコロナ前と比べ、粗利益は一〇〇倍以上になっていたのです。

倫理研究所の創設者、丸山敏雄は次のように述べます。

ことに純情の人(また人々)が私のない高い目的のために心を一つにして命がけの働きを集めた時、そこに思いもよらぬケタはずれの見事な結果が現われる。これを、人間は「奇跡」という。(『人類の朝光』)

一日三通のハガキを書く実践を通して自分の心を磨き、沸き上がる感謝の思いは自らの報酬を捨ててまでも従業員を喜ばせる無私の働きにつながったといえるでしょう。

現在もN氏はハガキの実践を継続しており、お客様に「おいしかったよ、また来るよ」と言われることに生きがいを持ち、感謝の心で仕事に励んでいます。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局